

## 横光以降を問うこと

山崎義光

横光の作品史のなかで論じること、横光が受けた先行諸テクストとの影響関係、同時代の東アジアや欧米を含む、文学、思想、社会評論などの諸言説のなかで位置づけること。多様なテーマでこれまで研究が積み重ねられてきた。なかでも本会では、作家の個人史、作品史とは別の文脈において、横光の文学的営為がもつ意義を討究する企画も、大会・研究会集いでおこなってきた。最近のテーマをひろってみても、川端文学研究会との合同研究会による「横光利一と川端康成——『文学時代』創刊まで——」（第一〇回研究会集、二〇〇九・八）、日本近代文学会東海支部との合同開催による「モダニズムの土壌を問ひ直す」（第八回大会、二〇〇九・三）、立命館大学国際言語文化研究所との共催による「東アジアネットワークのなかの横光利一」（第九回研究会集、二〇〇八・八）など。横光の文学的営為を同時代的な視点から多角的にとらえるテーマであった。

そのテクストが書かれていた時に、本人にすら気がついて多様なアプローチを期待したいと思う。明治から大正初期にかけて形成されてきた「文学」に対する変革期に活躍した横光のことである。近代化の成熟、世界戦争の時代に、「文学」に対する思想と社会運動の優位が叫ばれる一方で、表象の地殻変動が生じ、芸術的アヴァンギャルドに近い場所から自らの「文学」をつむぎはじめた。純文学と通俗文学との分化の時代にあつて、そうした分化を横断するテクストたりうべきことを「純粋小説」の呼び名とともに構想・実践もした。もちろん、それは必ずしも成功したとばかりは言えず、旧時代的、同時代的な同調圧力に屈し流されているとも、迷走とも、反動ともみなしうる側面をもつとも論じられてきた。そうしたなかで、殊のほか多く論じられてきた作品は、近代都市上海という場所で起こった、起こりえた、社会の、認識の地殻変動に、「文学」において反応した「上海」であろう。

ただ、どうだろう、横光の「文学」的営為の残したことに ついては、あまり論じられてこなかったように思う。戦時下から戦後にかけての上海において、横光よりあとに活躍した作家として、武田泰淳や堀田善衛がいる。とくに、堀田善衛との関連から論じた、石田仁志「堀田善衛「広場の孤独」論——横光利一からの承継」（『論樹』一九九六・九）や黒田大河「堀田善衛と上海——「祖国喪失」と「無国籍」のあいだで——」（『日

いないことを掘り起こすこと、史的系譜論的な問い方もよし、また、影響を受けた何ごとか、影響を与えた何ごとか、あるいは、直接的な接触がなくとも、同時性を問い、その広がり のなかでの差異を問うことがあってもいい。逆に言えば、問 いに見合った説得力がありさえすれば、こうでなければ、あ めでなければならぬということはないはずである。そもそも、「文学」という領域は、周辺諸領域——政治や経済、人文科学や自然科学、文化的諸現象、社会的諸言説といった他の領域と相互浸透しつつも、言語による独自の表象領域を形成してきた。「文学」なればこその特異性に見合ったアプローチが必要である。だが、その分だけ、どのようなアプローチが有意義か可能かが問われる。これまで、どこで何が強いられていたのか、何をなそうとしたのか、何がなされたのかについて、他でもない「文学」という領域だからこそその意義が探究されてきたと思う。今後も、横光の「文学」テクストを前に、どのような問いが有意義かという問いから出発した、

本近代文学」二〇〇九・十一）は、その意味で貴重で興味深い問題提起をしているように私には思われる。

上海という場所が「文学」における表象の生成にインパクトを与えたのは、第一次世界大戦後の一九二〇年代から第二次世界大戦後にいたる、地球規模での同時性、運動性が世界化していく時代の地殻変動が凝縮してそこに起っていたからではないか。とすると、それは、上海という場所の表象であることをはるかに越える射程をもった出来事だったのでなかったか。横光の新しいさなり、表現における試行錯誤があつたのは、そうした「世界」の地殻変動に見合っていたはずで、だとすれば、横光以降の「文学」のありようとの連続性についても考えられるはずだ。

その意味で、柳瀬善治が『三島由紀夫研究「知的概観的な時代」のサインとゾルレン』（創言社二〇一〇・九、第三部第四章）で、三島研究の文脈から開いて見せた視座、戦前戦中の横光から、三島、吉本隆明の文学論、中上健次、ゼロ年代のセカイ系にいたるまでの小説・批評の連続性を示唆しているのは興味深い。横光の個人史、作品史、同時代という文脈に加えて、横光を「二十世紀表象史の再検討」の可能性へと開いていくテーマも追求されてよいのではないか。

# 横光利一研究

## 第九号

### —— 特集 モダニズムのボーダー ——

- 「不行儀」の行方 —— 横光テキストにおける恋愛とモダニズム —— …… 芳賀 祥子 (3)
- 〈係争〉としてのハンガリー体験 —— 横光利一「罌粟の中」を中心に —— …… 韓 然善 (16)
- 横光利一「旅愁」における現代性としての〈非合理〉  
—— 他者化という方法の互換性 —— …… 館下 徹志 (31)
- 横光利一の故郷意識 —— 「屍」と「矢代」をめぐる —— …… 神谷 忠孝 (48)
- 横光利一「寝園」論 —— その象徴空間と意識の闇 —— …… 日置 俊次 (57)
- 現象としての「芥川龍之介」と横光利一  
—— 一九二〇年代の文学的ダイナミズムの一環として —— …… 副田 賢二 (76)
- 横光利一賞の生滅と「新人」の意味  
—— 第二回・永井龍男の受賞を視座として —— …… 和泉 司 (93)
- 【研究ノート】  
横光利一「上海」の典拠 —— 雑誌「国際パンフレット通信」・長野朗「華僑」 —— …… 掛野 剛史 (110)
- 【資料紹介】  
島村嘉一の教育関係論文および翻訳について(二) …… 重松 恵美 (123)
- 【書評】  
河田和子著『戦時下の文学と〈日本的なもの〉 —— 横光利一と保田與重郎 ——』… 野坂 昭雄 (134)
- 井上謙・掛野剛史・井上明芳編  
『横光利一 歐洲との出会い —— 「歐洲紀行」から「旅愁」へ』 …… 吉田 司雄 (138)
- 《研究展望》  
横光利一文学会の終焉 …… 野中 潤 (142)
- 個人研をめぐる雑感 …… 杉浦 晋 (146)
- 横光以降を問うこと …… 山崎 義光 (148)
- 《新視角シリーズ》  
「美しき裏切」島村健司 / 「青い大尉」袖谷英紀 / 「古い女」伊東佳朗 / 「失恋」松村 良  
「父母の真似」芳賀祥子 / 「最初の日」古矢篤史 / 「古戦場」佐藤良一 …… (150)
- 横光利一参考文献目録(『横光利一文学会会報』第十三～十八号掲載分)  
平成十六年(二〇〇四)～平成二十二年(二〇一〇) …… 玉村 周・松村 良 (165)
- 投稿規定 …… (176)

2011年3月 横光利一文学会